

平成 19 年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
第 3 回森林生態系保全再生手法検討ワーキンググループ
議事概要

◆日 時 平成 19 年 12 月 21 日（金）13：30～16：30

◆場 所 環境省近畿地方環境事務所 会議室

◆出席者

<委 員>

川瀬 浩	日本野鳥の会奈良支部 支部長
佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館 学芸員
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
前田 喜四雄	奈良教育大学教育学部付属自然環境教育センター 教授
松井 淳	奈良教育大学教育学部 教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科 講師

(以上敬称略)

<事務局>

近畿地方環境事務所	田邊 仁	統括自然保護企画官
	高橋 勝志	野生生物課長
	福原 裕	国立公園・保全整備課 自然保護官
	櫻澤 裕樹	国立公園・保全整備課 自然保護官
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志	環境部リーダー
	保延 香代	環境部リーダー
(財) 自然環境研究センター	永津 雅人	第三研究部長
	岸本 年郎	研究員

◆議 事

(1) 西大台利用調整地区にかかるモニタリングについて（資料 2、2-2、3）

①植生調査について（資料 2）

- ・植生調査地点については、人の利用による影響を受けている地点だけでなく、人の影響を受けておらず、ポテンシャルが高い（植被率が高い）地点にも設置すべき。
- ・植被率で見る限りは、人かシカの影響かの判断ができない。組成についても見ていく必要がある。
- ・ポテンシャルが高い調査地点として、ウラジロモミやマンネンスギ等が生育するギャップ地に一つポイントを設定することを検討する。（事務局）
- ・開拓跡付近は歩道がどこなのかわからないので、マナーを訴えるだけでなく、明確に区別するべき。
- ・各調査地点毎に最低でも 3 ラインは必要。

②植生回復調査について（資料 2）

- ・踏み分け道という言葉はシカが利用しているという誤解を与えるので、使用を抑制した歩道等の呼称を考える必要がある。
- ・現状の調査で裸地が回復しなかった時に利用調整が十分でなかったと結論することは避けないといけない。人による利用の影響をみるためにには、対照区には人もシカも入らない柵などが必要ではないか。
- ・裸地の回復状況を見るだけではなく、裸地の拡大について見ておく必要がある（特に開拓など）。
- ・植生がない所（裸地）がどこなのかというデータが必要。
- ・定点写真のとり方などを工夫して、視覚的に裸地や踏み分け道の回復がわかるようにする方がよい。
- ・ブラウン・ブランケの5段階（25%刻み）ではなく、10段階（10%刻み）の基準を使用することを検討すべき。

③希少植物調査について（資料2）

- ・奈良県版レッドリストが公表されたので、それも考慮すべき。
- ・種によって調査手法を変更すること、指標種を絞ることが必要。
- ・来年度の春季に調査を実施して、指標種の選定等検討する。（事務局）

④蘚苔類調査について（資料2-2）

- ・マクロの視点から植生調査地点と同じ環境で実施できるように調整すべき。
- ・協議会の参加者は専門家以外も多数出席するので、なぜコケを指標とするか、また結果が分かりやすいようにとりまとめるべき。

⑤土壤動物調査について（資料3）

- ・結果は種別にまとめて評価する。
 - ・指標種を定めて、サンプル数を増やす等省力化して実施すべき。また、指標種の選定、手法の検討にあたっては、専門家にヒアリングを実施すること。
 - ・西大台のモニタリングについては、この結果をもって評価し、次年度の適正化計画に反映させる必要があるので速報値を出して、詳しい解析は次年度以降という流れにしたい。
- （事務局）

⑥鳥類調査（資料3）

- ・種により人からの影響の受け方が全く異なる。利用者の数ではなく、サイトによる違いに過ぎないのではないか。
- ・天気や時間による要因が大きく、人の影響を評価するのは非常に難しい。実施するのであれば繁殖期にするべき。

西大台利用調整地区に係るモニタリング計画（修正案）（資料4）

- ・計画の期間等については基本的によいが、通常調査と特別（詳細）調査で重みを変えて効率的に実施するべき。

(2) 森林生態系保全再生計画の見直しに向けた論点整理について（資料5）

- ・シカの個体群保護管理が言及されていないのは不自然である。
- ・④オープンランドの拡大防止に対してササ刈りはおかしい。森林の回復促進も入れるべき。
- ・オープンランドという表現はやめてササ草原とすべき。
- ・航空写真を有効に使って、ギャップの状況（新旧）を判断して対策を立てるべき。
- ・②、④は林縁部（疎林的環境）への対策、③、⑤は森林環境への対策、①は両者の混ざったものになっているので、これを再整理し直すべき。
- ・希少種保全の視点からの問題についても検討すべき。
- ・大きな目標（中期目標）をまず決めて、それから個別具体的な目標（短期目標）を決めしていくべき。
- ・特定の場所（ゾーニング）で何をするというような具体的な目標は短期目標に入れる。
- ・「森林環境保全再生を目指す所（森林後退の抑制）」と「草原環境を森林環境へと再生すべき所（森林の復元）」の2つに分けて対策をとるべき。さらに広葉樹林とトウヒ等の針葉樹の違いで区別すべきである。
- ・大台ヶ原の保全すべき生態系を抽出してまとめるとよい。

(3) 動植物モニタリング調査結果の報告について

動物モニタリング調査について（資料8）

- ・テリトリーマッピングについては、新規のルート8を除いて種ごとの全体の合計を出すこと。

◆その他

- ・西大台のモニタリング調査結果についてはすぐに詳細な評価をする必要はなく、継続することが重要と考えられる。緊急に対策が必要というような結果はでていない。
- ・来年度も利用調整開始前の周知徹底をすること。

[文責：近畿地方環境事務所]